



学 習 目 標 例

【参考】文部科学省『外国人児童生徒のための JSL 対話型アセスメント(DLA)』

【作成】日本語指導が必要な児童生徒を対象とした指導の在り方に関する検討会議

【初期の前期段階 大目標例】

- ・日本の学校生活や社会生活に関する最低限のルールを理解し、意思疎通を単語レベルでできるようにする。
- ・日本の学校生活において、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度を育成する。

【初期の後期段階 大目標例】

- ・日本の学校生活や社会生活に関する理解を深め、日本語で学校生活に参加するために必要な文字や文など基礎的な日本語の力を育てる。
- ・日本の学校生活や社会生活において、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度を育成する。

【学習目標項目例（観点別の目標）】

以下に「話す・読む・書く・聴く」の各技能の観点別の「学習目標項目例」を、日本語を初めて学ぶ段階の「初期指導（前期）」、日常会話ができるまでの「初期指導（後期）」、在籍学級の授業に参加できるまでの「教科につながる学習段階」の段階別に挙げます。

『外国人児童生徒のための JSL 対話型アセスメント（DLA）』（文部科学省・平成 25 年度）には、日本語の発達状況の技能別・観点別「JSL 評価参照枠」が掲載されています。ここに挙げる「学習目標項目例」は、「JSL 評価参照枠」の 6 段階のステージと対応をしています。

対象児童生徒の「個別の指導計画」を作成する際に、例えば「指導対象の児童の書く力は JSL 評価参照枠のステージ 1 の段階なので、来学期はステージ 2 の a, b を学習目標とする」というように日本語の力に応じた「学習目標」を設定することができます。

在籍学級の授業に参加できるまでの指導で、「JSL カリキュラム」との関連で指導計画を作成する場合は、「教科につながる学習段階」の資料を参照してください。

★「JSL 評価参照枠」の 6 段階のステージと「個別の指導計画」の学習目標項目の段階と『外国人児童生徒受入れの手引き』の日本語プログラムとの関係について

「JSL 評価参照枠」		「個別の指導計画」の 学習目標項目の段階	『外国人児童生徒受入れの手引き』 の日本語プログラム
ステ ージ	学齢期の子ども の在籍学級参加との関係		
1	学校生活に必要な日本語の習得が始まる。	初期指導 (前期)	
2	支援を得て、学校生活に必要な日本語の習得が進む。	初期指導 (後期)	
3	支援を得て、日常的なトピックについて理解し、学級活動にも部分的にある程度参加できる。	教科につながる 初歩的な学習	
4	日常的なトピックについて理解し、学級活動にある程度参加できる。	教科につながる 基礎的な学習	
5	教科内容と関連したトピックについて理解し、授業にある程度の支援を得て参加できる。	教科につながる 学習	
6	教科内容と関連したトピックについて理解し、積極的に授業に参加できる。	教科学習	

＜話す＞

JSL 評価 参照 枠の ステ ージ	指導の 段階	「個別の指導計画」のための学習目標項目例		○他技能との関係 ●指導のヒント
1	初期指導 (前期)	a	周囲で話されている日本語に関心を持ち、積極的に使おうとする。	○母語を使うことができない環境に置かれているため、非言語的なコミュニケーションの方法で、注意を引いたり、何かを要求したりする。また周囲を観察したり、行動を試したりしながら、学校生活や日本語に関する情報を集めている段階である。 ○「聞く」力を土台にして「話す」力が育つ。(聞いてわからないことは、話せない。) ○「話す」力の習得には個人差があり、話し出す前に長い「沈黙期」を必要とする場合もある。 ●発話を強要せずに、自分から発話するまでじっくり待つ。
		b	毎日使う自分の持ち物や、教室にあるものの名前を言う。	
		c	支援を得て、簡単な自己紹介をする。 (例：名前や学年など)	
		d	周りの人が言う簡単なあいさつや短い単語、定型表現を真似して繰り返す。 (例：「ありがとう」「おはよう」「書いて」など)	
		e	周りの様子を見て、行動を真似ながら、それに伴う語句を言う。(例：「起立、礼」)	
		f	自分に関する基本的な質問に対して、単語レベル(「はい(うん)」／「いいえ(ううん)」)や身振り手振りで答える。	
		g	ジェスチャーや表情や簡単な単語を使って、学校生活に必要な最低限の意思疎通を行う。 (例：「だめ」、「トイレ」、「ごはん」など)	
2	初期指導 (後期)	a	自分自身のことについて、簡単な質問を理解し単語レベルで話す。 (例：年齢、家族の人数や構成、出身国など)	●まだ流暢度を欠き、活用が不正確であったり、語順が乱れたりするが、楽しく対話に参加できるような配慮をする。 ●日本語の摂取量が多くなるように座席の指定や仲間作りに配慮する。
		b	毎日の生活に関することを頻度の高い単語や定型表現を使って話す。	
		c	体調を訴えたり、許可をもらったり、簡単な質問をしたりする。(例：「おなか、痛い」「ノート、わすれた」)	
		d	日常生活でよく使われる語彙や表現を使って話す。	
3	教科に つながる 初歩的な 学習	a	聞きなれた言葉を組み合わせて、自分自身のことや身近な出来事について、主に単文を使って話す。 (例：好き嫌い、毎日の習慣、昨日あったことなど)	●まだ文法的な間違いが多く、語彙も多くないが、子どもの発言の主旨を汲み、やりとりの中で表現したい内容を引き出し、不足している語彙や表現を補充して、いいモデルを示す。 ●単語レベルで答えられる質問から、文レベルの答えが必要な質問へと変えていく。
		b	日常的な内容についての質問に、簡単な日本語で自分の感想や考えを言う。	
		c	学校生活や学習場面で必要となる要求表現等を、簡単な日本語で伝える。	
		d	学校生活で必要となる場面で、質問をする。	
		e	自ら、一対一の会話に参加する。	

4	教科につながる基礎的な学習	a	連文（2，3文）を使って，日常の出来事（過去の経験を含む）や学習のことについて，意味の通じる話をする。	○日常的な会話が流暢にこなせるようになる。 ●朝の会での短いスピーチなど，日本語使用の機会を増やす。 ●普段あまり聞かない教科と関連した語彙や表現はまだ使えないので，その点に留意した指導が必要である。 ●取り出し指導で学んだことが，在籍学級の学習の場で活かせるような教員間の情報共有が大切である。
		b	自分から質問したり，説明したりして，教科学習にある程度参加する。	
		c	教科と関連のあるテーマで，自分の意思や相手に伝えるべき内容を，簡単な日本語で発表する。	
		d	授業の中でグループ学習に参加する。	
5	教科につながる学習	a	さまざまなトピックの会話に積極的に参加する。	○教科と関係のあるトピックでも流暢に話せるようになる。 ●教科学習に必要な語彙や表現を使って話す機会を増やすとよい。 ●日本語スピーチコンテストなど，大勢の人の前で話したり，発表したりする経験も有効である。
		b	学習内容について，複文を使いながら，順序立てて話す。	
		c	（多くはないが）教科学習の語彙を使って，まとまった説明や発表をする。	
		d	教科学習におけるグループでの話し合いに参加し，発言をする。	
		e	（間違いはあるが）丁寧表現や敬語を使った会話に参加する。（小学校高学年以上の場合）	
6	教科学習	a	年齢相応の教科用語を使って，一人でまとまった話をする。	○複数の聴者に対して適切な話し方ができる。 ●異なった文化的背景から来る子どもの視点や意見を引き出すように指導するとよい。
		b	教科内容に関連した話し合いに積極的に参加する。	
		c	相手や場面・目的に応じて，効果的な表現方法を用いて話す。（例：教科学習のプレゼンテーション，ディベートなど）	
		d	クラス全員に対して，学習内容について，教科用語を使い筋道を立てて詳しく説明したり，発表したりする。	
		e	丁寧表現や敬語を使った会話に参加する。（小学校高学年以上の場合）	

＜読む＞（文字・表記　＋　読み・読解力）

JSL 評価 参照 枠の ステージ	指導の 段階	「個別の指導計画」のための学習目標項目例		○他技能との関係 ●指導のヒント
1	初期指導 （前期）	a	日本語で書かれた自分の名前や普段よく使う単語を識別する。	○「聞く」力の方が「読む」力よりも強い。 ●学校図書館の利用方法について教え、日本語が読めなくとも楽しむことのできる図書を紹介する。 ●文字や簡単な単語が母語で読めない場合は、日本語の文字の習得にも時間がかかると考え、指導計画を作成する。
		b	文字と音とが対応することを理解する。 （例：平仮名の「あ」を見て/a/と発音する。） （小学校低学年の場合）	
		c	平仮名をいくつか読む。	
		d	よく耳にする馴染みのある短い平仮名の語を読む。	
		e	視覚的な支援のある絵本や紙芝居などの読み聞かせを楽しむ。	
2	初期指導 （後期）	a	特殊音節（長音、拗音、撥音、促音）を含む平仮名の単語を読む。	○漢字の読みと書きについては、書きの方が習得に時間がかかる。しかし、漢字圏出身の子どもは、書きの方が早い場合も多い。 ○「読む」力は、年齢や母語の学習体験によって習得の度合いが異なる。特に小学校低学年の場合は、2i, 2j, 2kに、より時間がかかる。 ●漢字は学年より下でも、内容は年齢相応の話題を選ぶ。 ●母語と共通の数字や記号（＋－×÷＝など）を組み合わせ、数の読み方を練習させながら、基本的な計算力のチェックができる。また、それにより、日本語の学習だけでなく文章題が扱えない間、計算問題で既習学力の維持を図ることでもある。
		b	分かち書きで書かれた短い文を音読する。	
		c	句点や読点について理解する。	
		d	助詞の「は」、「へ」を文中で正しく読む。	
		e	縦書き・横書き、一字下げ、句読点など、表記法のルールを理解する。	
		f	片仮名をいくつか読む。	
		g	片仮名で書く語彙の種類を理解する。	
		h	特殊音節（長音、拗音、撥音、促音）を含む片仮名の語彙を読む。	
		i	小学校1年で学習する漢字をいくつか読む。 （象形文字や指示文字）	
		j	絵などの支援を得て、日常生活でよく使われる語彙で書かれた短文を読んで理解する。	
		k	絵などの支援を得て、片仮名や小学校1，2年の学習漢字が混じった文を読んで大意を理解する。	
3	教科に つながる 初歩的な 学習	a	文節や意味のまとまりで区切って読む。	●幼児期に本に親しむ経験のない子どもには、読み聞かせをするとうい。 ●小1，2程度の漢字学習が終了したら、あとは学年別漢字配当にこだわらず、現在学習している教科で頻出している漢字を学ばせるようにする。（特に、算数・数学
		b	日常生活でよく使われる語彙（教科名、曜日、標識など）を読んで意味が分かる。	
		c	学年より下の学習漢字が混じった短文を読んで大意を理解する。	
		d	絵ややりとりなどの助けを得て、学年より下のレベルの親しみのある内容のテキストを読んで大意を理解する。	

		e	未習の語彙を推測によって読む。	は頻繁に使われる漢字がある。) ● 沢山の本や文章を読む機会を作り、読書量を増やし、読書習慣をつける。
		f	単語の並び順や見出し語（活用のないことば）を理解して、辞書（日本語から母語）を使う。 （小学校中学年以上、母語で読む力がある場合）	
4	教科につながる基礎的な学習	a	教科用語の入った短い文章を読んで、大意を理解する。	○「読む」力が「聴く」力に近付いていく。 ○高学年や母語の読みの力の高い児童では音読よりも黙読を好む子どもが現れる。 ●いろいろな種類の本や文章に親しむ機会を作り、読書の幅を広げる。
		b	漢字の基本的構成（部首、音訓、筆順、送り仮名など）を理解する。	
		c	支援を得て、物語文を読み、登場人物や場面について理解する。	
		d	支援を得て、説明文を読み、時間的な順序や事柄の順序などについて理解する。	
		e	段落の意味を理解して、その内容を大体読み取る。	
		f	読むことを通して新しい知識・アイディア・感情・態度などを学ぶ。	
5	教科につながる学習	a	教科特有の語彙の入った文章を読んで、大意を理解する。	○高学年では黙読の方が音読よりも速くなる。 ○母国で学習経験のある漢字圏出身の中学年以上の児童生徒は、さらに早い時期から漢語や漢熟語が入った文章を理解する。 ●自分の学習をコントロールし、自律的に学習を進めていけるような支援を行う。 ●話し言葉と書き言葉の違いがはっきり認識できるように指導する。
		b	複数の段落のある文章の大意を理解する。	
		c	手紙文、観察文、報告文、説明文など、いろいろな種類の文章を読み、大意を理解する。	
		d	本や文章を読み、疑問点を質問したり、考えたことを発表したりして、内容の理解を深める。	
		e	本や文章を読み、重要な点を抜き出したり、感想文を書いたりして、内容の理解を深める。	
		f	未習の語彙、漢字、複雑な文構成の文の意味を推察する。	
		g	漢語・漢熟語が入った文章を読んで大意を理解する。 （小学校高学年以上の場合）	
6	教科学習	a	語彙表や辞書などの助けを得て、学年相応の教科書を読んで大意を理解する。（小学校中学年以上の場合）	●自分の考えを形成する読み方を指導する。 （感想や批評を述べたり、情報を比較するなど。小学校高学年以上）
		b	手紙文、観察文、報告文、説明文など、いろいろな種類の文章を読み、分野やジャンルによる構成や表現の違いを理解する。（小学校中学年以上の場合）	
		c	未習の語彙、漢字、文構成があっても読みの流れを止めずに大意を理解する。	
		d	文章全体の大意を把握し、自分なりの意見や感想を持つ。	

＜書く＞（文字・表記 + 作文力）

JSL 評価 参照 枠の ステ ージ	指導の 段階	「個別の指導計画」のための学習目標項目例		○他技能との関係 ●指導のヒント
1	初期指導 (前期)	a	筆記道具の持ち方や姿勢に注意して書く。 (小学校低学年の場合)	○書きたいことを絵や文字で示そうとする。 (特に小学校低学年の場合) ●「話す」力の方が、「書く」力よりずっと強いので、絵で示したことを話す機会をつくるとよい。 ●母語で読み書きの指導を受けておらず、自分の名前も簡単な単語も書けない場合は、日本語の文字の習得にも、より時間がかかると考えて、指導計画を作成する。
		b	自ら経験したことを絵や単語（日本語か母語）で示す。	
		c	大きなマス目の中に文字を書く。 (小学校低学年の場合)	
		d	文字と音とが対応することを理解する。 (例： /a/と発音して平仮名の「あ」を書く) (小学校低学年の場合)	
		e	自分の名前や普段よく使う単語を書く。	
		f	いくつかの平仮名や、馴染みのある短い平仮名の語を書く。	
2	初期指導 (後期)	a	いくつかの片仮名や、馴染みのある片仮名の語を書く。	○話し言葉をそのまま文字にしようとする。 ●多少地域特有の言い回しが混じっても、容認する。 ●生活日記などを通して、「です・ます」の文章に慣れさせる。
		b	平仮名や片仮名で、特殊音節（長音、拗音、撥音、促音）を含む単語を書く。	
		c	小学校1年で学習する漢字をいくつか書く。 (象形文字や指示文字)	
		d	助詞の「は」、「へ」及び「を」を正しく書く。	
		e	平仮名や片仮名や基礎的な漢字を使い分けて文を書く。	
		f	毎日の生活に関する事柄について、頻度の高い単語や定型表現、基本文型などを使って、連文（2，3文）を書く。（例：3～5行程度の生活日記など）	
		g	自分と関係のあるテーマについて、日常よく使われる語彙や慣れ親しんでいる表現を使って、短い文を書く。	
3	教科に つながる 初歩的な 学習	a	日常使う漢字表記の語彙（教科名、曜日、標識など）を書く。	●課題作文は、書く範囲を限定し、テーマを具体的に指示すると書きやすい。 ●文法的な誤用の多い時期であるが、間違いを通して、正確な文構成に気付くように支援する。 ●小1，2程度の漢字学習が終了したら、板書は学年相応の漢字で書き、未習漢字に振り仮名をつけ、ノートに視写するように指導する。
		b	年齢より下のレベルの漢字を書き順や送り仮名などに注意して書く。	
		c	教師が示すモデルにそって、平仮名、片仮名、漢字を使い分けて文章を書く。	
		d	学校の行事など経験した事柄について、順序に沿って簡単な構成の文章を書く。	
		e	観察したことを記録する簡単な文章を書く。	
		f	物語の好きな場面について、簡単な感想を書く。	
		g	段落に分けて文章を書く。	
		h	支援を得て、書こうとすることの中心を明確にして作文を書く。	
		i	句読点、一字下げ、カギ括弧など、表記上のルールに留意して文を書く。	

		j	原稿用紙を正しく使って文章を書く。	
		k	書いた文を読み返し、教師やクラスメイトの支援を得て、文字や語句の誤りを直す。	
4	教科につながる基礎的な学習	a	基本的構成（部首・音訓・筆順・送り仮名など）を理解して、学年よりやや低いレベルの漢字を使って書く。	○「です・ます」体で統一された文章が書けるようになる。 ●読書の幅を広げ、いろいろな種類の文章に親しむ機会を作る。 ●母語で作文やレポートを書いた経験がある児童生徒は、日本語で作文を書く時も文の構成等を理解しやすい。
		b	興味のある課題に対して、日常語彙を使って作文を書く。	
		c	書き言葉や教科用語を使って文章を書く。	
		d	会話文、書き出しやしめくくり、簡単な喩えなど表現の工夫をしながら書く。	
		e	誤用はあるが、さまざまな構成の文を使って、意味の通じる文章を書く。	
		f	意味のまとまりのある段落に分けて文章を書く。	
		g	書いた文章を読み返し、自分で間違いなどに気付き、ある程度推敲をする。（小学校中・高学年以上の場合）	
5	教科につながる学習	a	参考資料や辞書を使い、資料を収集して文章を書く。	○「話し言葉」と「書き言葉」では、語彙や表現、文体（例：「です・ます」体、「だ・である」体など）などが異なることに気付く。 ○「書く」力は、年齢や母語の学習体験によって習得度が異なる。5a～5g は小学校中・高学年以上を想定している。 ●場面や目的に応じて、語彙や表現、文体を使い分けることを指導する。 ●書き言葉的な表現を積極的に使うように指導する。
		b	内容に見合った語彙や表現や文体を使って作文を書く。	
		c	話し言葉と書き言葉の違いを意識して、学年相応に近い漢字や漢熟語を使って作文を書く。	
		d	敬体と常体の違いに留意して、統一のとれた文体で文章を書く。	
		e	内容を複段落にまとめ、段落間のつながりに留意して書く。（例：接続表現）	
		f	複雑な文構成（例：従属節など）を含む文章を書く。	
		g	書いた文章を読み返し、読み手の立場に立って推敲する。	
6	教科学習	a	内容に見合った長さの作文を書く。	○作文を書く前の準備と書いた後の推敲をするようになる。 ●テーマに適した漢語・漢熟語の使用や日本語特有の文末表現（例：断定せず、問いかけで終わるなど）を使うように指導する。
		b	内容が豊かで、全体の構成を考えた複段落の作文を書く。	
		c	テーマに見合った適切な語彙や学年相応の漢字を使って書く。	
		d	表記上、文法上、正確度の高い文章を書く。	
		e	書く前に、参考資料や辞書を使ったりして、考えをまとめてから書く。（小学校中学年以上）	
		f	目的や読み手に合わせて、手紙文、観察文、報告文、意見文など、分野やジャンルによる構成や表現の違いに留意して文章を書く。（小学校高学年以上）	
		g	書いた文章を読み返し、文章全体を意識して推敲をする。（小学校高学年以上）	

＜聴く＞

JSL 評価 参照 枠の ステ ージ	指導の 段階	「個別の指導計画」のための学習目標項目例		○他技能との関係 ●指導のヒント
1	初期指導 (前期)	a	周囲で話されている日本語に関心を持ち、聴いて理解しようとする。	○「聴く」力が「話す」ことの基礎になる（つまり、聴いて理解できないことは話せない）。 ●聴いたことを口頭ですぐに言うことを強制せず、子どもが自発的に発話するまで待つことが大切である。
		b	簡単な挨拶や日常よく使われる定型表現を聴いて、繰り返す。 (例:「おはよう」、「ありがとう」、「またあとで」)	
		c	健康や安全に関する簡単な指示を聴いて、理解する。 (例:「手を洗って」、「あぶない」)	
		d	周囲の仲間やクラスメイトの簡単な日本語の語りかけを状況で判断し、関係づくりに加わろうとする。	
2	初期指導 (後期)	a	日常生活でよく使われる語彙・表現を聴いて理解する。	●やりとりの中で、子どもの単語レベルの発話を、文レベルにして返すとよい。
		b	自分自身のことについての簡単な質問を大体理解し、やりとりに参加する。 (例:年齢,好きなもの,家族の人数や構成,出身国など)	
		c	学校での日課に関する指示を聴いて、適切に従う。	
		d	新しく耳にする語彙や語句を聴いて、繰り返す。	
		e	学校生活に関係のある連文(2,3文)の簡単な指示や質問を、ゆっくりとした速さで繰り返し聞き、その内容を推察する。	
		f	実物や絵,身振りなどの支援を得て、ゆっくりとした速度の平易な言葉を使った1対1の会話を理解する。	
3	教科に つながる 初歩的な 学習	a	身近な内容について、連文の短い話を聴いて、大意を理解する。	○学年が上がるにつれて、在籍学級で使われる教科特有の語彙や表現の理解が難しくなる。 ●教科につながる学習段階の具体的な支援の例については、『学校教育におけるJSLカリキュラム中学校編』の各教科の「Ⅱ.日本語支援の考え方とその方法」に「支援の具体例」(p.13~18)が掲載されているので、参考にしていきたい。
		b	体育,音楽などの実技系の授業で、教師の話を理解し、簡単な指示に従う。	
		c	実物や絵,身振りなどの支援を得て、普通の速さの教師の話(例:「運動会のお知らせ」など)を聴いて大体理解する。	
4	教科に つながる 基礎的な 学習	a	身近な内容のまとまりのある話を聴いて、大意を理解する。	
		b	授業のテーマに関連した内容について、平易な言葉で説明を聴いて、大体理解する。	
		c	授業のテーマに関連した教科用語や表現を聴いて、一部理解する。	
		d	自分の分からないことを聴き直したり尋ねたりする。	
		e	グループでの話し合いに参加し、大意を理解する。	

5	教科につながる学習	a	教科学習の内容に関心を持ち、集中して聴く。	●聴いて分かる教科用語や表現を板書や視写などを通して、漢語・漢熟語力につなげる。
		b	教科学習で、教師が説明する内容の大筋と流れをある程度理解する。	
		c	授業のテーマに関連した書き言葉的な語彙や表現を聴いてある程度理解する。(小学校中・高学年以上)	
		d	教科学習で、グループや学級全体の話し合いや発表を聴いて、大意を理解する。	
		e	丁寧な表現を使った文を聴いて、その意味を大体理解する。	
6	教科学習	a	通常のスPEEDで進む教科学習の中で、教師が説明する内容の大筋を理解する。	●教科用語をただ聴いて分かるだけでなく、自分でも使える語彙にするために、話の内容を再話させる機会を与えるとよい。
		b	教科学習で、学級全体の話し合いや発表に積極的に参加する。	
		c	授業のテーマに関連した抽象的な語彙や表現を聴いて理解する。(小学校高学年以上)	
		d	丁寧な表現も含め、様々なスタイルの文章を聴いて理解する。(小学校高学年以上)	

【参考となる母語の力】

子どもがどの程度、母語（あるいは第一言語、L1）で「聴く」「話す」「読む」「書く」力があるかによって、その後の日本語の伸びが違ってきます。

母語を使って年齢相応の教科学習を行った経験がある子どもは、その経験を踏まえて日本語の学習言語の習得も速くなる傾向があります。

しかし、何らかの理由で学校教育に断絶があり、年齢相応の学習を経験していない子どもの場合は、「聴く」「話す」はできても、「読む」「書く」や学習言語の習得に時間がかかります。

日本生まれや幼児期に来日した子どもは、日本語を流暢に話しても、母語の語彙は少なく、母語ではほとんど会話ができない状況にあるのが普通です。母語での教科学習経験がないため、学習言語の獲得に時間がかかります。

言語習得上何らかの機能的障害がある場合は、日本語と母語に同じような兆候が現れます。

学校に転編入する際の面接などで、母国での就学経験・成績、家庭内言語など、母語に関する状況を聞いて把握するとよいでしょう。